教養講座

日本語というもの（第二回）

——日本語の音声——

藤原与一

〔1〕

音節という単位

私どもの日本語の発音を反省してみますのに、これは、カナ一文字一文字で書きあらわすことのできる単位に区切れることがわかります。たとえば朝の「早いなあ。」という音声言語の表現ですと、これは「ハ・ヤ・イ・ナ・ア。」というように区切れます。この「ハ」なり「ヤ」なりの一区切れを、音節といいます。植物の竹で言えば、ちょうど一節々々のようなものですから、音節という名でよいわけです。日本語では、この音節が、発音上の単位になります。

わが国のカタカナ・ひらかなは、早くから、音節文字といわれています。日本語音声の音節をあらわす文字という意味であります。まさに、カタカナ・ひらかなは、日本語の音節をあらわす文字として、漢字から発生し、その発達をとげてきました。カタカナ・ひらかなは、わが国固有の文字です。わが国独自の文字がこのように発達したのは——その文字は音節をよくあらわすのは、そもそもわが国語の発音の習慣が、音節という区切れを、基本的な単位とするものだったからにほかなりません。逆に、音節という発音上の単位が、人に、基本的単位としてみとめられるならば、その人は、カタカナ・ひらかなが、まさに国字として、国語に即したものであることを、諒解し得るでありましょう。

西洋のローマ字は、たとえば、日本語音声の一音節文字「カ」なら「カ」を、「Ka」と書きあらわします。われの一文字は、かれの二文字になるわけです。これをさらにいいますと、「カ」は一音節の音価をあらわしますが、「K」などは、一音節にたりぬ、もっと小さい単位の発音しかあらわさぬしだいです。このようなローマ字を、単音文字ということができます。単音文字をとる言語では、音節が基本単位とはなりません。

開音節

日本語では音節が基本的な単位になるところが特色です

が、さらに大事なことは、その一々の音節が、いわゆる母音でおわっていることです。音節をローマ字で書きあらわしてみますと、「カ」は「Ka」になります。「プ」は「Pu」になります。KやPのあらわす音は、子音といわれています。aやuのあらわす音は、母音といわれています。日本語の一音節一音節を、ローマ字で表記してみれば、それらはいずれも子音にはじまって母音におわる音声の構造であることがわかりましょう。PやKであらわせる子音は、やってみますと、口を閉じたり、舌の奥の方を閉じたりする発音です。aやuであらわす発音は、とにかく口のあいた発音です。そこで、「カ」なら「カ」という音節の発音ですと、閉じたところからパッと開く発音、つまり、開いた発音であることがよくわかります。これを開音節といいます。

いわゆる五十音図の第一行、ア・イ・ウ・エ・オの音は、ローマ字で表記してみますと、a・i・u・e・oになります。これは、子音と母音との結合ではありません。では、これらは、特殊な音節かといいますのに、特殊といえばいちおう特殊ですが、もうひとつ考えますと、「母音の装飾としての子音が、ゼロになった開音節」、すなわち開音節一般と考えることができます。この考えかたは、全体に統一をつけてよいと思うのであります。ア行音は基本的な開音節だと、いえなくはありません。

このように、わが国語の開音節を考えてきますと、開音節こそは、日本語の音声の根本特色をなすものだということができます。

これを現代英語の発音にくらべてみますのに、むこうではたとえばinkというような語があって、これが一音節に発音され、そのおわりはKという子音です。音節は、母音によって開かれてはいず、子音で閉ざされています。これは閉音節ということができます。閉音節と開音節とのちがいは、大きなちがいといわなくてはなりません。英語ですと、アクセントは強弱アクセントであり、日本語は高低アクセントを主としますが、このちがいは、音節構造のちがいに関連していましょう。英語では強と弱とからなるさまざまの律動感が人に快感を与えますが、日本語では、一拍二拍と拍子を打っていくその拍節的リズムが快感を与えます。この相違も、両方の、音節構造の相違にもとづきましょう。開音節の言語と閉音節の言語とでは、一方は母音的、一方は子音的ともいうことができ、両者はたがいに、その音声的風土を異にするともいうことができるかと思います。音声的風土の特質によって、おのおのの国語は、その特有のこのみ——音声上のこのみを発揮していると解されます。

日本語の拍子

古来、日本語では五七五・七七(和歌)とか、五七五(俳句)と

か、また七五七五……とか、五七五七……とかいって、拍子がかぞえられてきました。これはつまり日本語の音節、それも開音節の計算でした。その際、ともかくも、五音と七音とが愛好されてきたことは、まことに注目すべき、大きな事実といわなくてはなりません。いってみれば、日本語に生きる人々は、由来、こんなに、五音七音を愛好してきたのであります。

五音七音と申しますが、五音と七音とを別個に愛したのではありません。五音と七音とのつながりを愛好してきたのであります。開音節は、これを多くならべてみますと、じつに規則正しい形だということがわかります。それが、五七五とか、五七五七とかとくりかえされるとしたら、いかにも調子のよい拍節的リズムを感じることができましょう。日本の唱歌というものは、とかく七五調の文句をとってきましたが、広く愛唱されるためには、自然に、こうならないではすまなかったのでしょう。俳句という芸術、和歌という文芸、定型詩という詩形が、すこしもおとろえることなく、ますます国民大衆に愛好されていくようでありますが、この隆盛は、もともと、国民がひとしく感じ得る、拍節的リズムの快感——先天的な感情によっているだろうと思われます。

五音と七音とのつながりは、分析してみますと、7—5＝2、つまり、二音差を持ったつながりです。私は、この二音（二音節）という数がだいじな数だと思うのであります。2は偶数です。五七や七五のつながりの音感は、この偶数音差ということに特色づけられてはいないでしょうか。偶数の数ゆえ、五七や七五のわたりゆきには、おだやかな、やわらかな、ほどのよい音感を感じ得るのではないでしょうか。そこで、日本語の音律を、かりに偶数的音律などとよんで、今後この点に思いをよせることにしてはどうかと思うのであります。

七七などというのは、同音数がくりかえされるのですからしかも二回というのですから、これも快いはずです。が、いま、音節数は問題にしなくても、ただ、音節のならびを注意深く読んだだけでも、私どもは、しみじみと、調子のよい拍節的リズムを感じることができます。たとえば、

静かな晩です
火がもえます

というような文句があったとします。これを、単純に意味だけとって読んでしまえば、二行とも、ほんの一いきのことばですが、今、

シ ズ カ ナ バ ン デ ス
ヒ ガ モ エ マ ス

というように、おちついて読んでみますと、自然に、やわらかい調子がつたわってくると思うのであります。一つ一つの

音は開いた音節で、その規則正しい形の開音節が行儀よくならんでいるのですから、私どもが、一々の音をたどるここちで秩序よく読み進んでいけば、まさに、適当な間隔の庭石をたどるような快感——律動感をおぼえるのであります。

「ン」は撥音と言われるもので、いわゆる開音節のすがたをとってはいませんが、日本語の音声の拍節的リズムの中では、これも、まったく一音節なみの単位になっています。つまる音、促音も同様です。「トマッテ」というのでしたら、四拍にかぞえてちょうどよいありさまです。

右の例、二行を読みつづけると、何となく調子がよいことが感じられますが、さてと、二行を読みくらべてみますと、一方は八音で、一方は六音です。その差はまた二音です。自由詩というようなものも、調子のよさを訴えてきましょう。そのよさの源泉は、音の配合にあるにちがいありません。

〔2〕

拍節リズムの教育

口ことばで、話をする時にも、たとえば〝私はただ今御紹介にあずかりました云々。〟と言う時にも、

ワタクシ　ワー

というようにならぬことが肝要だと思います。「ワタクシ」の四音をそそくさと言ってしまい、つぎに「ワ——」というのを長く引きますと、日本語音声の拍節的リズムは、すこしも生きてきません。これを、おちついて、順序よく、

ワ　タ　ク　シ　ワ

と、一歩々々、歩をはこぶように発音しますと、そして、最後の「ワ」も、あまりのばさないように、適当にひきしめますと、ゆとりのある、調子のよい発言になります。おのずから、品のよいことばつきになります。「私は」のつぎの「ただ今」にしても同様で、

タダイ　マ——

というようなことにしますと、日本語の発音としてのおちついたよさが出てきません。

もっとも、いろいろに変化させて発音したのが、かえって、個性みがよく出ておもしろいとも言えなくはないでしょう。実際に、そういうよい例もあるかもしれません。が、私がここで申しますのは、日本語の発音として、だれしもいちおうは根底に心得ておいた方がよいと思われる心得かたです。いったんこれを心得たら、応用はまた別のことです。

ふつうの音声教育としては、この拍節リズムの教育を重んじるのがよいのではないでしょうか。これによって、人々に、日本語の発音生活の常道を得させることができると思うのであります。日本語の音声は、開音節を根本特色とするからで

あります。

緩急・強弱・抑揚

部分々々では、拍節的リズムがつねに調子よく進行するように考えるとして、全体上では、一段高い次元で、緩急の調子をおこしてよいことであります。たとえば、〃この点は、もっとも大切であります。〃と言う時は、「この点は」の次に、「もっとも」を、一だん速度をおとして、「モットモ」と、ゆっくり発音することが、一種の効果的な表現になります。「モットモ」の四音節そのものはリズミカルに発音して、その全体をゆっくりめに発言するのであります。

緩急に、強弱がともない、また抑揚がいちじるしくともなって、ことばの調子というものができます。日本語の音声生活では、全体観としては、抑揚への着眼がたいせつになります。抑揚の教育ということを、今後、重要視したいものです。抑揚では、特に、文表現の末尾の声調に注意する必要があります。

開音節教育とその骨子

右は、音声教育の総合的方法に関することでありましたが、それに対して、分析的方法をとりあげますと、要は、開音節に着眼する教育がだいじということになります。

それも、骨子は、イ・キ・シ・チ・ニ以下のイ段音と、ウ・ク・ス・ツ・ヌ以下のウ段音とに注意することにあると言えましょう。というのは、これらの開音節は、i母音u母音を持っています。こんな、口の開きのせまい母音の音節の発音は、とかく不鮮明になりがちだからです。この点を用心して、かつ、イ段音とウ段音とがはっきりと張り合うように発音させることにすれば、明晰な発音生活を得させることができると思うのであります。

（三〇・七・一〇）

話すということは、人間が、その内にあるものを、必要に応じて、音声言語に表わしていくことである。話すためには、なによりもまず、話す内容がなくてはならない。内容が高まって、これが自然に発出するのが、むりのない話しである。内容とは、人間の生活内容であり、価値内容である。大人についていえば、一般教養ないし専門教養の体系がそれである。このゆえに、話すことの教育にも、前提として、全人間の教育が、有力にはたらいていなくてはならないことは明らかであろう。内容をきたえることなくして、「話しかた」を指導してみても、大したことにはならない。宿題をわすれて、考えてこなかった者には、発表のしようもないことである。話しかたを当てがって、これに乗らせてみても、無から有は生じない。狭い国語教育の内で考えてみても、多く読み聞きさせ、深いものを受けとらせることの重要さは明らかである。（下略）

（藤原与一著　毎日の国語教育より）